みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

英国コッツウォルズ地域の民宿経営における女性の役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塩路, 有子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001944

石森秀三・安福恵美子編『観光とジェンダー』
国立民族学博物館調査報告　37:55-69(2003)

英国コッツウォルズ地域の民宿経営における女性の役割

塩路　有子
阪南大学国際コミュニケーション学部

Women's Roles in Management of Bed and Breakfast in the Cotswolds, Britain

Yuko Shioji
Hannan University

本稿の目的は，英国の民宿経営における男女の労働内容とその関係性を民族誌的に記述し，民宿経営における女性の役割について明らかにすることで，観光が地域のジェンダー関係に及ぼす影響について考察することである。具体的事例としてコッツウォルズ地域の3つの民宿に焦点をあてた。その結果，女性の役割が家事労働に従事する主婦から主体性をもって民宿経営に取り組む自営業者へ変化していることがわかった。その変化の過程は事例によって多様性がみられるが，経済的理由や夫である男性の労働との関係性が女性の意識の変化の主な要因となっていることが明らかになった。

This paper investigates an influence of tourism on gender relationship in Britian by focusing on women's roles in management of bed and breakfast. It is a case study based on anthropological fieldwork of men and women's daily work in three families of bed and breakfast in the north Cotswolds. The study demonstrates a change of women's role as from a house wife to a self-employed manager of bed and breakfast. Although the process of this change is diversified in each case, economic reasons and relationship with men's work are becoming main factors of the change of women's consciousness.

1　はじめに
2　コッツウォルズ地域における民宿
3　3つの民宿の事例
3.1　農家民宿Aの場合
3.2　一般民宿Bの場合
3.3　一般民宿Cの場合
4　3つの民宿の共通点と差異点
5　おわりに

＊key words: Britain, The Cotswolds, bed and breakfast, women
＊キーワード：英国，コッツウォルズ地域，民宿，女性

1　はじめに

本稿では，「ジェンダー」を男女の関係性のなかで成立する概念であると捉える。その上で，民宿経営における女性のあり方に着目することで，観光が地域のジェンダー関係に及ぼす影響について検討する。具体的には，英国コッツウォルズ地域の民宿に焦点を

あて，民宿経営における女性の労働と意識について，男性の労働や意識との関係性とともに明らかにし，民宿経営における女性の役割について考察する。

観光と女性に関する従来の研究を総括した安福は，観光における女性の雇用が女性に及ぼす影響をプラスとマイナスの両面から論じている（安福 1997: 41-48）。ここでは，安福の論考に従いながら，英国の事例研究を中心に議論を整理，追加し，本稿で検討する内容の論点を明確にする。

まず，観光における女性の雇用が女性に及ぼす影響のマイナス面は2点あり，男女の社会的分業によって強調される。第一に，観光産業における女性の雇用は家事労働の延長であり，家事や育児以外に観光によって生じる対人サービス労働が加わることで，過剰労働になっている点をあげることができる（安福 1997: 41）。第二に，英国のホテルや飲食業など観光関連施設における就労は，季節性，パートタイム，未熟練労働が多いことから男女ともに不安定だが，女性の方がその傾向が強く，収入が不安定という点である（Bagguley 1990; Hennessy 1995）。

つぎに，プラス面も大きく2点あげられる。女性の経済的自立と社会的地位の向上である。観光による女性の収入は，家庭内における男女の役割に変化を生む。女性が経営者意識をもって観光に主体的に関わることで，家庭内における女性の権限の拡大につながる可能性もある（Bouquet 1987，98; Shaw and Williams 1994: 237-239）。スコットランド高地では，民宿を経営する女性たちが，自分たちの利益を守るために，ボランティアで協会を組織し，インフォーマル・セクターとしてではあるが，村の政治に影響力をもったという（Norris and Wall 1994: 66）。

これまで英国の観光における女性の雇用とエンパワーメントを論じるさいには，性的分業によるマイナス面がとくに強調されてきた。しかし，上述したプラス面に注目すると，性的分業よりも，むしろ女性が観光における雇用機会をいかに受け入れ，そのなかでいかに男性の労働と折り合いをつけているかという男女の関係性が問題になってくる。それが，結果として女性にとってプラスの側面を生みだしていると考えられるからである。つまり，本稿が論点とするのは，観光産業において女性が主体的に取り組むときの男女の関係性であり，そのうえで成り立つ女性の役割とは何かという点である。

女性が経営者意識をもって観光に主体的に関わる例は，広くヨーロッパのアグリ・ツーリズム，またはファーム・ツーリズムにおいてみられる（津端 1992; Garcia-Ramon 1995; Nilsson 2002）。例えば，スペインの農村地帯カタロニア地方とガルシア地方では，農業にかわる雇用としてファーム・ツーリズムが隆盛し，伝統的な農家における女性の役割が変化している。カタロニア地方では女性は農業観光ビジネスで経理を担当するようになり，ガルシア地方では収入の増えた農家の女性が，古い農家の修復や農業遺産を保存するようになったという（Garcia-Ramon 1995; 274-280）。

英国の南西イングランドにおいても，ファーム・ツーリズムによって農家の女性の役

割に変化が生じたことが報告されている（Bouquet 1987）。19世紀まで，大きな農家では，家族以外にも数名の住み込みの召使いと数多くの農業労働者を雇っていた。収穫期になると，農業労働者に食事をふるまったり，家族以外の多くの人間が家に出入りした。20世紀には，そのような大きな農家が，空いた部屋を利用して農家民宿を始め，家族に変化が生じた。農家の妻は，宿泊客をもてなす役目を負い，宿泊客はその家で最上の寝室，食堂と居間を使った。農家の家族は，旅行者が宿泊する期間，家の後ろ側の寝室に詰め込まれ，それまで伝統的に農家の妻とその娘たちの仕事場だった台所が一家の生活空間となった。また，農家の女性にとって，手作りのジャムやベーコン，ポテト・パイなどで親族や隣人をもてなすことは日常的に行われていた。しかし，20世紀後半になると，宿泊客の夕食には1人分の肉と野菜がセットになっている冷凍食品やビスケットとチーズなどが出されることが多くなったという。19世紀まで農業労働者など家族以外の人間を受け入れ，もてなすことに慣れていた農家の妻でも，20世紀の農家民宿経営によって，その役割が変化し，仕事量が増えたことで，家族と宿泊客の間に区別をつけるようになったのである（Bouquet 1987: 97-103）。

英国のカントリーサイドにおける民宿は農家民宿が原点といわれる。その意味では，本稿が焦点をあてる南西イングランドの農村地帯であるコッツウォルズ地域は，女性が民宿経営において主体的に取り組んできた場所のひとつといえる（塩路 2000）。本稿では，コッツウォルズ地域における民宿の事例をとりあげ，従来論じられてきた観光における女性の雇用が女性に及ぼすマイナス面をふまえながら，いかにプラス面が創出されているかについて明らかにしていく。

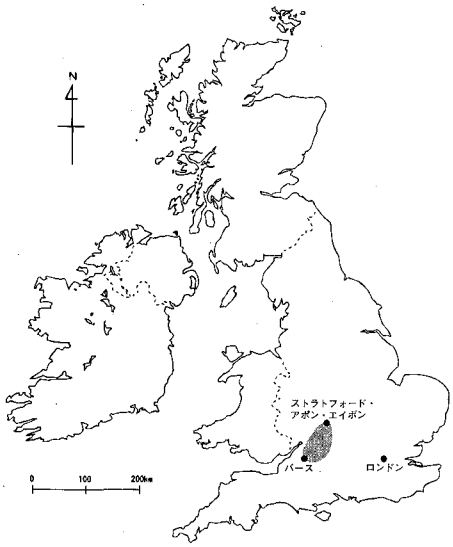
2 コッツウォルズ地域における民宿

コッツウォルズ地域（The Cotswolds）は，イングランドの中心部から南西に，北はストラトフォード・アポン・エイボン（Stratford-upon-Avon）から南はバース（Bath）にいたる160キロメートルに広がる丘陵地帯である。明確な行政区があるわけではなく，主にグロースターシャー州（Gloucestershire）などの5州にまたがる領域である（図1）。この地域には，現在，大小あわせて約145の町村が点在しており，約8万人が暮らしている。地域の生業は，農業と牧畜業であるが，年間285万人以上の観光客が訪れる有名な観光地でもあり，観光関連の雇用も全体の15.7%に及ぶ。この地域の宿泊施設は，ホテルや宿屋（inn），民宿（bed and breakfast）など，グロースターシャー州のコッツウォルド行政府が出版する宿泊施設ガイドに掲載されているものだけでも約334軒（1997年現在）ある。

宿泊施設の総数や種類については，行政府出版の宿泊施設ガイドに掲載されていない宿泊施設も考慮に入れる必要がある。例えば，同ガイドによると，地域北部に位置する

人口2,000人の町チッピング・カムデンの項目には，3つのホテルと3つの農家民宿，10軒の民宿など合計16軒の宿泊施設に関する情報が掲載されている。これらの多くは，実際には同町の周辺に位置する。一方で，同町の中心に位置するハイストリート沿いには，4つのホテル，未登録も含めて少なくとも8軒の民宿，3軒のパブリック・ハウスの宿屋がある。これらのほとんどは，町の中心部でアクセスしやすいことから，町周辺に位置する宿泊施設に比べて宿泊者誘致に窮することは少なく，宿泊施設経営者が行政の出版するガイドに情報を載せない場合が多い。このように，行政府出版のガイドには掲載されていないが，観光局支部の査定済みで既認可の宿泊施設，さらに未査定で未認可の宿泊施設も含めると，ガイドに掲載されている宿泊施設の倍以上の数の宿泊施設があると考えられる。

宿泊施設の種類の1つである民宿は，ホテルや宿屋とは異なり，一般の家庭に旅行者が宿泊するという点において，観光産業のなかでも地域の家族関係や夫婦関係など，ジェンダー関係に直接的な影響を及ぼす可能性が大きい。民宿には，大きく分けて2つの種類がある。農家民宿と一般民宿である。どちらも一般家庭で宿泊と朝食が提供される点では同じだが，農家民宿は農家の空いた部屋を民宿として利用しているもので，ごく稀に農家の仕事を体験させてくれるところもある。一般民宿は，専業もしくは副業のいずれの場合でも，農業や牧畜業をしている家ではなく，農家民宿のような農業体験などはない。カントリーサイドでは農家民宿は人気が高いため，「××農家（farm house)」と名のついた民宿が多い。しかし，実際に農業をしている農家民宿は少なく，元農家の古い建物を利用しているだけの一般民宿の場合が多い。



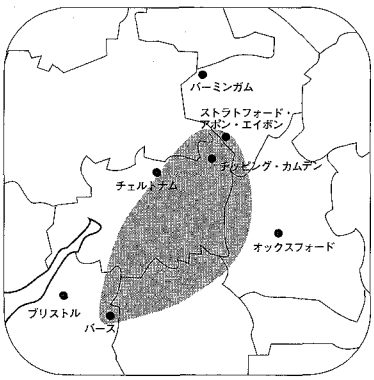


図1　英国全図とコッツウォルズ地域

3　3つの民宿の事例

本節では，事例としてコッツウォルズ地域北部に位置する3軒の民宿A，B，Cを取り上げる。これら3軒は，行政府が出版している宿泊施設ガイドに「X夫人（Mrs. X）というように妻の名前で情報を掲載しており，観光局支部に登録し査定を受けている既認可の宿泊施設である。また，いずれも最寄りの観光案内所に登録して，宿泊客の誘致を行っている。ここでは，1996年4月から2001年9月までの間に筆者が各民宿の経営者に対して行ったインタビューなどにもとづいて，民宿をはじめた理由と一日の労働スケジュール，民宿と地域の観光案内所との関係について記述する。

3.1　農家民宿Aの場合

民宿をはじめた理由

Rさんは，1972年から民宿Aを経営している60代後半の女性である。民宿Aは，穀物畑や家畜を所有する昔ながらの大きな農家であり，彼女の夫は農業に従事している。2001年現在，夫妻で暮らしている農家の3部屋を使って3月から10月まで民宿を営業している。この農家の建物は，1753年築という古いものであり，暖房設備であるセントラル・ヒーティングがないため，冬期は民宿は休業している。

Rさんがこの農家に嫁いだときには，姑がすでに民宿をやっていた。しかし，当時は現在のように広告を出していたわけでもなく，観光局もなかった。姑の時代は，近くの町のホテルから紹介された客など，月に6，7件の宿泊数だった。Rさん自身が民宿を始めた30年前でさえ，周辺に民宿はほとんどなかった。

Rさんが民宿を始めたのは，3人の子供達が10代になって少し手が離れたころだった。末息子が寮制の学校に行ったことで，空き部屋が3つでき，それを民宿用のトイレや浴室付きの部屋に改装した。各部屋の家具も使えるものは，そのままにして使うことにした。農業以外の副収入として民宿をはじめたわけである。

一日の労働スケジュール

Rさんは，民宿Aの仕事をほとんど一人でこなしている。子供達が幼なく，姑のいた頃には，台所の床掃除や洗濯，皿洗いなどをしてくれる女性など，民宿の手伝いをする人を雇っていたこともあったが，長くは続かなかった。現在，従業員はいない。結婚して家を出た娘がときどき手伝いに来る。一方で，彼女の夫は家事を手伝うことはほとんどなく，時折，皿洗い機に残った皿を取り出したり，朝食のパンを自分で切ったりする程度だという。Rさんの民宿の朝食を出す仕事が多忙を極めると，夫が手伝うこともあるが，「夫は農作業で一日中屋外にいることが多いので，民宿の仕事は手伝えない」と彼女はいう。しかし，夫は「よろず屋」でもあり，民宿の各部屋にシャワーを設置したり，屋根

裏部屋に続く階段をトイレに改装したりと，家の改装や修復の仕事などをしてくれるという。

Rさんの一日の労働スケジュール（表1）を見ると，基本的に時間のある時に客室の準備をするなど，家事と民宿の仕事をうまく組み合わせていることがわかる。客室数が3室と少ないことも理由の1つと考えられる。夫は，農業に従事し，民宿の仕事を手伝うことはほとんどないため，夫婦はそれぞれまったく別の労働スケジュールで暮らしている。その意味で，Rさんの民宿経営は，家事労働の延長であるといえる。Rさんの子供達が小さい頃は，育児も加わり，現在よりも重労働だったと考えられる。

Rさんは，農家民宿は，「現代の多様化した農業の一環」だと話す。農家民宿は女性が経営しているところが多く，経営者である女性の夫が手伝うことがあっても，男性が経営しているところは聞いたことがないという。農家民宿の場合，夫は農業，妻は農家の空いた部屋を利用して民宿を営むという経営形態が一般的である。また，そのような農家民宿の形態は，民宿の初期の形態であるともいわれる。

農業以外の副収入としてはじまった農家民宿だが，農業や家畜，牧草地などが直面する問題と無関係ではない。英国では，2000年秋から2001年夏にかけて，家畜に口蹄疫が大規模に広まったために農家に大きな被害を与えた。農場や牧草地が閉鎖され，さらには旅行者の増える夏には，パブリック・フットパス（Public Footpath）と呼ばれる牧草地を抜ける歩道も閉鎖された。フットパスを歩いた宿泊客が口蹄疫を異なる地域の家畜に媒介する危険性が指摘されたためである。この影響を受けて，カントリーサイドを訪れる人々は減少した。とくに，牧草地に囲まれる農家民宿では，宿泊客が激減した。民宿Aでも，6月半ばまで宿泊客は，ほとんどなかったという。Rさんは家畜への影響を考えて，宿泊希望者には必ずどの地方から来るのかを尋ねる。農家民宿では，農業との関係を配慮しながら経営する必要があり，夫の農業の状態に合わせて，民宿を切り盛りする妻の労働リズムが変化することがある。

表1　民宿Aの労働スケジュール

時間	民宿経営者（妻）の労働内容
6:30～6:45	起床。
7:15～7:30	夫（妻）の朝食。（妻は宿泊客の出発後にとることもある。）
7:30～8:30	宿泊客の朝食。（宿泊客の要望に応じて時間帯は変わる。）
8:30～	朝食の後片づけ。
10:00～12:00	宿泊客の出発後，客室の掃除。客室のシーツやタオルの洗濯。 （妻の朝食。）
12:00～13:00	昼食。その後，車で5分のスーパーに食品類の買い物。
13:00～	庭の手入れ,アイロンかけなど。宿泊客の到着，お茶の準備。
その他随時	労働スケジュールは特にない。労働スケジュール通りにいかないことが多い。 基本的に,客室の準備は，時間のある時に行う。 農業に従事する夫は，客室の浴室やトイレの改装や家の修理などを行う。

観光案内所との関係

民宿Aは，1マイルほど離れたM町でコッツウォルド行政府が運営している観光案内所に登録し，宿泊客の斡旋を受けている。しかし，その観光案内所は行政府が運営するため，Rさんは宿泊客の問い合わせなど事務的なつながりをもつだけで，案内所を手伝ったり，職員と知り合いになるほどではないという。観光案内所や観光産業との関係については，Rさんの姪が旅行会社をM町に所有していたことがある程度で，周辺地域の民宿とのネットワークにはあまり関心がない。Rさんと民宿Aは，むしろ昔から続く農家としての地域とのつながりの方が強いように思われる。

3.2　一般民宿Bの場合

民宿をはじめた理由

40代後半の女性Jさんは，1990年4月に民宿Bをはじめた。民宿Bは，古い農家を増改築した平屋づくりの一般民宿である。Jさんの夫は，主に農作物を扱う運送業をしており，大型トラックを数台所有する会社を経営している。2001年現在，ダブル，ツイン，ファミリーの異なる種類の3部屋をもつ民宿として営業している。

民宿Bを始める前，Jさんはロンドンのホテルで働いた経験をもつ。民宿Bの営業を開始した当時，彼女は税務署の常勤職員だった。しかし，夫の運送業の経営が落ち込んでいたため，手っ取り早く副収入を得る事業として，家にあるものを使って民宿をはじめたという。当初，ベッドやシーツなどは足りていたが，現在各室に備え付けてある湯わかし器やテレビはなかった。徐々に収入を得るようになってから，それらのものを購入し，民宿としての設備を整えていったという。次の労働スケジュールからも明らかだが，民宿Bは，副収入を得るためにはじめたにも関わらず，現在では，ほぼ専業の民宿となっている。

一日の労働スケジュール

Jさんは，自ら民宿Bの経営者だと言い，民宿経営についての意識は強い。彼女は，宿泊客の朝食用のジャムを手作りしたり，シャワーの形態を変えたりなど，これまで民宿の設備を工夫しながら改良してきたと話す。民宿Bでは，3人のパート従業員を1人ずつ毎日交代で雇っている。

彼女が民宿を始めた頃は，夫は民宿の仕事に多く関与していなかったとJさんはいう。しかし，当初，彼女が常勤の職についていたこともあって，夫は朝食を作ったり，客室の掃除や準備を手伝った。とくに，夫は，「料理に関してはとても協力的」という。現在も毎朝，夫は宿泊客の朝食を作っている。夫は，「私は自分の会社（運送業）を経営しないといけない。民宿の仕事は手伝っているだけ」で，妻の民宿の仕事を手伝うのは楽しいと言う。彼は，運送業に32年間（2001年現在）携わってきた。彼の大型トラックの運

転から始まった運送業の会社を，現在は実質上，息子が経営している。夫は資本的な責任を負い，電話で会社の従業員に連絡をとるなどして，息子の仕事を補佐している。そのため，妻の民宿の仕事を手伝えるのだと言う。彼は，朝食作りだけでなく，客室の掃除をし，宿泊客との会話も多い。さらに，彼は，2，3日連泊する客を無料で周辺の小さな村々をめぐる2時間のドライブに連れていく。この地域で生まれ育った夫は，宿泊客に「本物のコッツウォルズ地域」を見せたいのだと話す。

Jさんと彼女の夫の1日の労働スケジュールを見ると（表2），Jさんは客室の掃除や準備などの仕事を従業員に任せ，ときに夫に手伝ってもらっている。Jさん自身は，電話の応対やEメールや手紙などの連絡，帳簿つけ，宿泊客の応対など，より民宿の経営にとって重要な仕事を担当している。Jさんと知り合いの前述した民宿AのRさんは，Jさんの労働スケジュールについて，起床時間は自分より遅いが，より組織的で系統だてて働いていると言った。このことは，Jさんの民宿が民宿仲間の中でも，より専業に近い形で経営されていることを示していると解釈できる。

一方で，Jさんの夫は，自らの運送業以外に，空いている時間に民宿の仕事を手伝っている。夫は，運送業の仕事を終えて帰宅するとラウンジで過ごすが，そこは台所に続いているため，空間的にも夫は民宿の舞台裏の仕事を手伝うことを避けることはできず，常に宿泊客への応待にさらされている。

表2　民宿Bの労働スケジュール

時間	民宿経営者（妻）の労働内容	時間	夫の労働内容
7:30	起床。		
7:45	朝食のテーブル準備。	8:00	起床。
8:30～9:30	宿泊客の朝食。	8:15	宿泊客の朝食料理開始。
9:30～10:30	朝食の後片づけ,皿洗い機で皿洗い,台所の片づけ。	9:30～10:00	朝食の後片づけ,皿洗い機で皿洗い,台所の片づけ。
10:00～13:30	従業員が客室,浴室,朝食室,ラウンジ掃除,シーツやタオルの洗濯など。 従業員がいない場合,夫妻でこの仕事を行う。	10:00～19:00	宿泊客を2時間のドライブ。 民宿のゴミ出しや客室の湯飲み洗い。 従業員がいない場合,妻の仕事を手伝う。 妻が外出の場合,妻の仕事を行う。 運送業の仕事,必要に応じて所有する大型トラックの運転。
10:30～13:30	電話の応対,Eメールや手紙の返信,帳簿つけ,従業員の仕事の手伝い。		
13:30～19:00	電話の応対,宿泊客の到着と応対,宿泊客へのお茶,宿泊客と食事場所や翌日訪れる場所に関して会話。		
19:00～21:00	郵便物や買い物のためストラトフォードに外出,夕食の準備,13:30～19:00の仕事の続き。		
21:00～22:30	宿泊客へのお茶,宿泊客の翌日の計画に関して会話,電話の応対。	19:00～22:30	上記の仕事の続き。 多くの場合,大型トラックの運転。
毎週日曜日 14:00～19:30	チッピング・カムデンの観光案内所の手伝い。 12～15マイル車で銀行,必需品の買い物。	その他随時	民宿（家）の建設,修復や庭の整備。 12～15マイル車で銀行や必需品の買い物。 電話の応対,宿泊客の応対と会話,宿泊客へのお茶,宿泊客の車の修理など。
その他随時	庭の手入れ,果物の収穫,ジャムやゼリー作り。 家具や内装の修理,シーツのアイロンかけ,シーツやタオルの乾燥,宿泊客の洗濯物。 供給品目（茶碗,フォークやナイフ類,シーツやタオル類,家具,旅行者情報のガイドブックなど）の確認と注文,民宿のWebサイトの改訂など。		

このように，2人の1日の労働スケジュールからは，民宿に従業員がいない場合に夫妻協同で民宿の同じ仕事をする以外は，基本的にそれぞれの仕事を軸に活動していることがわかる。しかしながら，実際は，民宿の仕事が2人の生活と密着し，経営者のJさんだけでなく，Jさんの夫も民宿経営に日常的に関わっているといえる。また，夫自身も宿泊客との関わりを楽しんで民宿の仕事を手伝っているのである。

観光案内所との関係

Jさんは，毎週日曜日には，3マイル離れたC町にある観光案内所にボランティアで手伝いに行くなど，周辺地域の民宿関係者とのネットワークに参加している。C町の観光案内所は，1993年に発足した宿泊施設経営者から成る協会が運営しており，Jさんは1995年から1996年まで同協会の運営委員会の会計兼秘書をしていた。Jさんは，観光地として有名なC町の案内所を軌道にのせることで，自らの民宿も含めた周辺地域の民宿への宿泊客の斡旋や行政の補助など，地域に将来的に多くの便宜と利益がもたらせると考えている。事実，民宿Bの情報を行政府の宿泊施設ガイドのC町の項目に載せたところ，その年の宿泊客数が増加したという。

Jさんは，1997年まで週に3日と年末年始や公休日にも案内所の運営に携わっていた。Jさんの夫は，民宿の仕事ではなく，C町の案内所の運営に熱心な妻をみて，案内所は自分たちに何ももたらさないと言い，妻の案内所への関与に賛成していなかった。1997年に同委員会が常勤職員を1名雇用したことで，Jさんは週に1度，案内所の手伝いと委員会の集まりに行くだけになった。しかし，2001年現在もJさんは，案内所の手伝いを一向に辞めようとはしない。案内所の仕事は，広く旅行者と接する仕事であり，潜在的な宿泊客のニーズや動向を知ることができる。C町を含めた周辺地域について，旅行者の質問に答えるうちに地域の魅力を再認識したり，旅行者の行動パターンを知ることもできたという。また，他の宿泊施設経営者と知り合うことで，多くの情報交換もでき，お互いに臨機応変に助け合うこともできるようになった。Jさんにとって，それまで地域のなかで「点」でしかなかった民宿経営を，案内所の仕事を通して「地域ネットワーク」のなかに位置づけることができるようになり，地域とのつながりをもつようになった。同時に，案内所における他の民宿経営者である女性たちと情報を相互交換することで，それぞれの家族の事情も含めて，彼女自身の抱える民宿と夫の仕事の関係などに常に新しい視野をもって取り組んでいる。

3.3　一般民宿Cの場合

民宿をはじめた理由

Hさんは，夫とともに1995年から民宿Cを経営している40代前半の女性である。民宿Cは，人口数百人の小さな村の中心にあり，ダブル，ツイン，ファミリーと異なる種類の

4部屋をもつ平屋づくりの一般民宿である。それらの客室は，Hさん家族が暮らす母屋のまわりに，別棟として建設されたものである。そのため，各室は広い造りになっており，収容人数を増やすこともできる。Hさん夫妻には11才と13才の二人の娘がおり，子育てをしながら民宿を経営している。

民宿Cを始める前，H夫妻は，マン島で民宿をしていた。その後，夫妻は18ヶ月間，南フランスで小さな農場と民宿を経営していたHさんの両親のところで民宿と自炊の宿を手伝った。1993年に，Hさんの祖母の家だった現在の家（民宿C）を購入し，移り住んだ。Hさんの祖父母は，コッツウォルズ地域のこの村の出身で，家の隣のパブを経営していたという。H夫妻は，この村に移り住んでから，この地域にやって来る旅行者の多さに気づき，民宿を始めることに決めたという。民宿Cは専業の民宿であり，Hさん家族は民宿で生計をたてている。

一日の労働スケジュール

民宿Cは，Hさん夫妻が2人で経営している。現在，2人は家事や子育てと民宿の仕事の両方を分担して行っている。民宿Cの1日の労働スケジュール（表3）では，起床は夫婦同じ時間で，Hさんが宿泊客の朝食のテーブルを準備する間に，夫が家族の朝食をつくる。2人の子どもの学校への送迎と宿泊客の朝食の準備もその時の都合でどちらかが行うという。客室の準備についても，それぞれの作業は異なるが，協同して行っている。ただし，買い物をする都合から，その帰りに子どもの学校への迎えにはHさんが行くことになっている。民宿経営上の役割としては，夫妻の仕事は異なり，Hさんは民宿の経理や運営を担当し，夫は宿泊客の応待やもてなしを担当している。つまり，実質的には経営の主導権は，Hさんが握っている。

表3　民宿Cの労働スケジュール

時間	妻の労働内容	時間	夫の労働内容
7:00	起床。		
7:30	朝食のテーブル準備。	7:15	家族の朝食の準備。
7:45	夫妻のどちらかが2人の子ども達を14マイル離れた学校に車で送る。		
7:45～8:30	家に残った方が宿泊客の朝食を準備。		
8:30 9:15～9:45	宿泊客の朝食開始。子ども達の送迎から帰宅。 朝食の片づけ。宿泊客のチェックアウト。		
10:00	客室の準備開始。浴室･トイレの掃除。 ベッドからシーツなど寝具をとる。	10:00	客室の準備開始。客室のベッドメーキング。 掃除機をかける。
12:00	客室準備終了。簡単な昼食。郵便物の確認。		
13:30	町へ買い物。その後,子ども達を学校に 迎えにいく。(夫がする場合もある。)	13:30	電話の応対。宿泊客の到着と応対。 (妻がする場合もある。)
15:15	子ども達の帰宅。子ども達は宿題をする。		
16:30～21:00	宿泊客の到着と応対。宿泊客と会話。		
17:00～18:00	家族の夕食。		
その他随時	基本的にすべての仕事(子どもの学校への送迎や買い物なども含む)を夫妻で適宜分担する。 主に，民宿の経理と運営は妻，宿泊客の応対やもてなしは夫が担当する。		

しかし，Hさんは，民宿Cを始めた最初の4年間は，このような協同作業はなく，民宿の仕事も子育てもすべて自分がやっていたと言う。最初は2部屋だったが，それが3部屋，4部屋に増えていくにしたがって，Hさんは民宿の仕事と子育てや家事のすべてをこなすことは全く不可能になったと語る。そこで，夫が朝食をつくったり，民宿の仕事に協力的になったのだという。それに対して，夫は，それまでは民宿の仕事でも新しい棟の建設などの「別の仕事をしていた」と話す。Hさん自身は，夫が協力的でなかった1996年にも，協同で仕事をしている2001年現在も民宿Cを夫婦で「共に経営している」と言う。

観光案内所との関係

H夫妻は，より多くの宿泊客を自分たちの民宿に斡旋するために，近隣のC町の観光案内所の活動に携わっている。Hさんは，1997年には，民宿BのJさんの後をついで，観光案内所を運営する宿泊施設経営者の協会の秘書をし，夫妻はボランティアで観光案内所を週に数日手伝っていた。

ところが，案内所関連の仕事が増えすぎ，民宿の仕事に支障をきたしはじめたため，Hさんは協会の秘書を辞めた。H夫妻は，民宿BのJさんについても，観光案内所の運営に深く関わりすぎて，民宿の経営がおろそかになり，Jさんの夫がそれを懸念したのではないかと考えている。

2001年現在も，Hさんの夫は2週間に1度は観光案内所を手伝いに行っている。Hさんは，多くの宿泊客を自分たちの民宿に斡旋することができるため，夫が観光案内所を手伝うことには賛成している。

観光案内所のあるC町から2マイル離れた小さな村の民宿を経営するH夫妻にとって，観光案内所との関係は，宿泊客の斡旋が主な理由である。観光案内所を通した他の宿泊施設経営者との付き合いは，民宿の仕事に支障をきたさない程度にとどめている。彼らと地域との関係は，地域の学校に通う子どもたちを通して，すでに構築されているため，あえて観光案内所を通した地域のネットワークにこだわってはいない。

4　3つの民宿の共通点と差異点

本節では，前節で記述したコッツウォルズ地域の3つの民宿の共通点と差異点を項目ごとに整理する。

まず，民宿をはじめた理由は，民宿Aは農業の副収入としてであり，民宿Bも夫の運送業が落ち込んでいたために副収入が必要だったからである。しかし，民宿Cは一家の生計をたてるためだった。民宿Aは，農業を主体とする農家民宿であり，妻が民宿を切り盛りしていることを農業に従事する夫も妻自身も認めている。民宿Bは，専業に近い一般民宿であり，妻が民宿経営者であることを運送業をする夫も妻自身も認めている。民宿C

は，専業の一般民宿であり，夫妻で経営していることを両者が認めている。つまり，3つの民宿はいずれも妻が経営者もしくは共同経営者であり，それを自他ともに認めている点で共通している。

つぎに，一日の労働スケジュールについては，農家民宿Aの妻は，30年間に家事や育児とともに民宿の仕事をこなしてきており，過去にはかなりの重労働の時期もあった。夫は農業に専業し家事は一切手伝わないが，家の修理や改装には責任を負っている。民宿Aの夫婦は，全く異なる労働スケジュールで生活しているといえる。民宿Bでは，妻は民宿の仕事に専念し，夫は運送業経営のかたわら民宿の仕事を手伝っている。民宿Bの夫婦は，それぞれの仕事を軸にして働いているが，夫も宿泊客との会話やドライブを楽しみながら，民宿の仕事に日常的に携わっている。民宿Cでは，夫婦は基本的に家事や育児，民宿の仕事をすべて分担し，協同して行っている。ただし，妻は民宿の経理や運営，夫は宿泊客の応対や家の増改築を担当しているため，実質的に民宿の経営の主導権は妻が握っている。このように，一日の労働スケジュールは，重労働の時期もあり夫の協力をほとんど得ていない民宿Aの妻から，日常的に夫の助けを得ている民宿Bの妻，すべての仕事を夫妻で分担して行う民宿Cの妻まで，夫の協力の度合いに応じて労働形態が異なることを示している。さらに，そのような労働形態の違いは，農家民宿から兼業の一般民宿，そして専業の一般民宿へと民宿の経営形態の違いも反映している。

また，地域の観光案内所との関係については，民宿Aの妻は，観光案内所は手伝わず，宿泊客の斡旋など事務的な繋がりのみの関係をもつ。昔ながらの農家である民宿Aは，すでに地域にネットワークの基盤があるからと考えられる。一方で，民宿Bの妻は，観光案内所をかなり熱心に手伝っている。案内所の運営委員会の会計兼秘書もしていた。将来的に地域に便宜と利益をもたらすために，町の案内所を軌道にのせたいという彼女の考えには，それまで「点」でしかなかった民宿経営が案内所の仕事によって地域ネットワークの中に位置づけられ，地域とつながりをもつようになったという経営者としての意識の変化が存在していた。民宿Bの妻は，地域で生まれ育った夫のネットワークに加え，案内所では民宿経営者である女性たち同士の交流もあり，民宿Cの妻とも情報交換している。民宿Cでは，観光案内所には夫が2週間に一度手伝いに行く。妻は民宿Bの妻も担当していた案内所の運営委員会の秘書をしていたこともある。民宿Cの夫妻は民宿Bの妻とは異なり，多くの宿泊客を得るために案内所を手伝う。地域のネットワークは彼らの子どもたちの学校を通してすでにもっている。つまり，すでに地元で農家としての地位を確立している民宿Aや学校に通う子供をもつ民宿Cにとっては，観光案内所を通した地域ネットワークはあまり重要ではない。むしろ，民宿Cでは宿泊客を増やすために観光案内所との関係を存続させているにすぎない。ところが，専業に近い兼業の一般民宿Bは非常に熱心に案内所と関わろうとしている。このような差異は，地域ネットワークの中で観光のジェンダーへの影響を考える上で，女性の出自やその夫の出自によ

る地域とのつながり，さらにその家族や親族の仕事や学校を通した地域との関係性も重要な要素となることを示している。

5 おわりに

これまでの記述を通して，民宿経営における女性の役割について考察する。本稿が取り上げたコッツウォルズ地域の民宿経営における女性の労働の事例からは，家事と育児が加わり過剰労働の時期もあった農家民宿，適度に夫の助けを得ている兼業の一般民宿，すべての仕事を夫妻で分担して行う専業の一般民宿まで，夫である男性の協力の度合いに応じて妻である女性の労働の量や質は異なっていた。当然，民宿の経営形態の違いは，女性の労働やその夫の協力の度合いに影響していると考えられる。

一方で，民宿経営における男性側の労働に焦点をあてると，農業労働に専念，運送業経営と民宿の仕事，民宿経営の中でも客の応対を担当など，男性それぞれの仕事と民宿の仕事の関係があり，民宿の仕事を担当する場合でも男女で経営上の役割分担がみられる。男性側の仕事が先にあり，その後に民宿という事業が付加されたことで，それぞれの家族に経済面的収入をもたらすとともに役割分担に変化が生じたことは明白である。

このような女性と男性の労働の関係性は，民宿経営における女性の経営者意識を導き出す要因となる。たとえば，男性が農業のように屋外で労働することが多い場合は，民宿の仕事にほとんど関わりをもたない。そのため，その妻である女性は，民宿の仕事や家事などを自分一人で切り盛りするようになり，かえって独立した経営者として強い意識をもつようになる。

3つの民宿の事例からも，民宿経営における女性の意識は，経営者もしくは共同経営者であり，それを女性自身もその夫も認めているという点が明らかになった。そのような女性の経営者としての役割は，農家の副収入を得るために民宿の仕事を任されているという自負や地域ネットワークのなかで自分の民宿を位置づける経営に対する自信や民宿の経理や全体の運営を担当しているという自負に裏打ちされているように思われる。さらに，それらの自負や自信を成り立たせている要素として，男性の労働との関係性が存在しているわけである。

本稿では，民宿経営における女性のあり方に着目してきた。結果として，観光が地域のジェンダー関係に影響を及ぼし，女性の役割が主婦としての家事労働や副収入をもたらす共働きから経営者意識をもつ自営業者へと変化していることがわかった。しかし，その過程には，経済的理由や夫である男性の労働との関係性，さらにそれらによる女性の意識変化というミクロ・レベルでの多様な変化の過程が存在し，その過程にも個々の民宿や家族によって多様性があることが明らかになった。

謝　辞

本稿をまとめるにあたって，国立民族学博物館共同研究会「自律的観光の総合的研究」に参加させて下さった同博物館の石森秀三教授，「観光とジェンダー」に関して助言を下さった平安女学院大学の安福恵美子教授に深く感謝申し上げる。本稿にかかわる1996年4月から2001年9月までの英国コッツウォルズ地域における調査のうち，1996年4月から1997年10月までの1年半に及ぶフィールドワークは，旅の文化研究所研究奨励金，および大和日英基金の研究助成により可能になった。ここに記して感謝したい。

文　献

Bagguley, P.

1990 Gender and Labour Flexibility in Hotel and Catering. *Service Industries Jourrnal* 10: 737-747.

Bouquet, M.

1987 Bed, Breakfast and an Evening Meal: Commensality in the Nineteenth and Twentieth Century Farm Household in Hartland. In M. Bouquet and M. Winter (eds.) *Who From Their Labours Rest?: Conflict and Practice in rural Tourism,* pp.93-104. Hants: Avebury.

Garcia-Ramon, M. D., G. Canoves and N. Valdovinos

1995 Farm Tourism, Gender and the Environment in Spain. *Annals of Tourism Research* 22: 267-282.

Hennessy, S.

1994 Female Employment in Tourism Development in Tourism Development in South-West England. In V. Kinnaird and D. Hall (eds.) *Tourism: A Gender Analysis*, pp.35-51.Chichester: John Wiley and Sons.

Nilsson, P. A.

2002 Staying on Farms: An Ideological Background. *Annals of Tourism Research* 29(1): 7-24.

Norris, J. and G. Wall

1994 Gender and Tourism. In C. P. Cooper and A. Lockwood (eds.) *Progress in Tourism, Recreation and Hospitality Management* 6, pp.57-78. Chichester: John Wiley and Sons.

Shaw, Gareth and A. M. Williams

1994 *Critical Issues in Tourism: A Geographical Perspective*. Oxford: Blackwell.

塩路有子

2000 「英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究――文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相」（博士論文，総合研究大学院大学）。

津端修一

1992 「ヨーロッパのアグリツーリズム報告――熟し始めた農村休暇とそれを支える女性たち」『地方行政』1月13日号，pp.2-9。

安福恵美子
1997 「観光と女性――研究の現状と動向」『東横学園女子短期大学女性文化研究所紀要』6, 37-53。